蜂須賀家のお姫様

その美しくも波瀾万丈の人生

　徳島藩の歴代藩主蜂須賀家のお姫様は、あまり大河ドラマなどにも登場せず人々の話題になることも少ない。

　しかし、魅力的な姫も多く歴史の大きな流れの中で翻弄されながらも、波乱万丈の人生を力強くそして美しく生きた。

2017年12月19日

とくしま学博士
徳島城博物館ボランティアガイド

坪内　強

お姫様とは？

姫を敬っていう語。皇帝・国王・貴族など身分の高い者の娘のこと。また転じて純情で世の中の常識に疎い娘を指したりもする。

姫とは

　ヒメ（媛、日女、比売、比咩、姫）は、貴族や領主の女性名に付けられる尊称。古くは地域の女性首長を表す尊称、また原始的カバネの一つ。
　「ヒメ」の語源は「日(ヒ)の女（メ）」である。
　日の女とは、大地に対する太陽であり、地神（土着）系の女性と区別される、天孫・天神系の女性を意味した。

　日本においては「姫」は本来年齢を問わない呼び方であり、高齢の女性に対しても「姫」と呼んでいた。

日本人にとって憧れのお姫様は？

木花咲耶姫（コノハナサクヤヒメ）
日本神話の天照大神の孫の「ニニギノミコト」の妻

飛鳥の時代のお姫様

額田王

鏡王の娘で大海人皇子（天武天皇）に嫁し十市皇女を生む。
後に天智天皇に寵愛される。
「茜指す紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」は有名

鸕野讃良（うののさらら）

天智天皇の娘。13歳で叔父の大海人皇子に嫁ぐ(与えられた)。
天智天皇は鸕野讃良皇女と共に大田皇女、大江皇女、新田部皇女の娘4人を
弟の大海人皇子に与えた。

後に持統天皇となり、天武天皇の政策を引き継ぎ、完成させたとされている。

古事記における天孫降臨
持統天皇は夫の天武天皇が崩御したのち、皇后の立場で政治を執ったものの、
皇子の草壁皇子（くさかべのみこ）が亡くなったため、自らが天皇に即位した。
その後、草壁皇子の子、すなわち持統天皇の孫にあたる文武天皇に譲位した。

政略結婚の多い時代に愛を貫いた女性

「北条政子」　伊豆国の豪族、北条時政の長女。

　周囲の反対を押し切り、流人だった源頼朝に嫁ぎ正室となる。
頼朝亡きあと征夷大将軍となった嫡男・頼家、次男・実朝が相次いで暗殺された後は、
傀儡将軍として京から招いた幼い藤原頼経の後見となって幕政の実権を握り、
世に尼将軍と称された。

「おね」（高台院）　秀吉の正室　北政所　摂政・関白の正室の称号。

　木下藤吉郎（豊臣秀吉）に実母・朝日に身分の差で反対されるも、兄の家定が自らも
秀吉に養子縁組すると諭したため無事に嫁いだ(通説では14歳）。

　当時としては珍しい恋愛結婚であった。
結婚式は周囲に反対された事と夫の身分の低さから藁と薄縁を敷いて行われた質素な
ものであった

「まつ」　前田利家の正室

　利家と一つ屋根の下で暮らしていて利家に好意を持っていたたまつ。数え12歳と
なった年、21歳だった利家に嫁ぐ。まつは、2男9女の合計11人の子供に恵まれた

軍記物語を彩る皇族、武士貴族の愛妾　白拍子

白拍子

　白拍子（しらびょうし）は、平安時代末期から鎌倉時代にかけて起こった歌舞の一種。及びそれを演ずる芸人。 今様，朗詠などを歌い，鼓で拍子をとった。
　初めは水干を身につけ、立烏帽子をかぶり、白鞘巻をさして舞ったので、男舞と呼んだ。途中で烏帽子、刀を除けて、水干だけを用いるようになって白拍子と名付けられた。

白拍子舞　　能の元祖?

　古く遡ると巫女による巫女舞が原点にあったとも言われている。神事において古くから男女の巫女が舞を舞う事によって神を憑依させた際に、場合によっては一時的な異性への「変身」作用があると信じられていた。

　このうち、巫女が布教の行脚中において舞を披露していく中で、次第に芸能を主としていく遊女（あそびめ）へと転化していき、そのうちに遊女が巫以来の伝統の影響を受けて男装し、男舞に長けた者を一般に白拍子とも言うようになった。

　後に、田楽、猿楽などへと変貌していった。後に早歌（そうが）や曲舞（くせまい）などの起こる素地ともなった。また延年にも取り入れられ、室町時代初期まで残った。

静御前の舞姿

歴史上の白拍子

白拍子を舞う女性たちは遊女とはいえ貴族の屋敷に出入りすることも多かったため、見識の高い者が多く、平清盛の愛妾となった祇王や仏御前は有名。

源義経の愛妾となった静御前やその母の磯禅師、後鳥羽上皇の愛妾となった亀菊など、貴紳に愛された白拍子も多い。
特に後鳥羽院は院中に白拍子奉行を置いて白拍子を管轄させた。
源頼朝も11名の白拍子を抱えていたと言われている。

傀儡子(舞)　西宮神社の恵比須舞の元祖?

「日本で初めての職業芸能人」といわれている。操り人形の人形劇を行い、女性は劇に合わせた詩を唄い、男性は奇術や剣舞や相撲や滑稽芸を行っていた。
呪術劇の要素も持ち女性は禊や祓いとして、客と閨をともにしたともいわれる。傀儡女は歌と売春を主業とし、遊女の一種だった

奥嵯峨　冬の祇王寺

祇王　祇女　母刀自　仏御前

政略結婚

武将の妻だというだけで人質に取られたり、殺されてしまうことも当たり前だった時代。政略の道具として嫁いだお姫様。
それでも妻として母として女として生きた彼女たちはきっと素敵な女性だったのだろう。

濃姫　帰蝶/歸蝶（きちょう）胡蝶（こちょう）とも

織田信長と斎藤道三との和睦が成立し、その証として1549年に政略結婚が行われた。(数えで15歳信長より１歳下。)

しかし、信長は結婚後も年上の若後家、生駒吉乃に惚れに惚れて、生駒家に通い続け、1557年の信忠に次いで、信雄、登久姫を生ませる。吉乃は連続した出産で産後の肥立ちが悪く永禄9年（1566年）死亡する。

正室の濃姫には子供がなく信忠を養子にしたと言われている。

信長はその後も他に9人もの側室を持ち、11男まで産ませている。

美濃から見知らぬ尾張の地に嫁ぎ、父にも早く死なれ、子宝にも恵まれず、多くの側室が次々に子供を出産するのを見て暮らした濃姫の心中は如何だっただろうか。　没年不明

その美しさゆえに、敵に召し上げられ歴史に名を残すお姫様

常盤御前

常盤は近衛天皇の中宮・九条院の雑仕女ぞうしめで、雑仕女の採用にあたり都の美女千人を集められ、その百名の中から十名を選んだ。その十名の中で聡明で一番の美女であったという。後に源義朝の側室になり、今若、乙若、そして牛若（後の源義経）を産む。

平治の乱で夫が死亡した後清盛のもとに出頭し、子供達が殺されるのを見るのは辛いから先に自分を殺して欲しいと言う。常盤の美しさに心を動かされた清盛は今若、乙若、牛若を助命したとされている。『平治物語』

『義経記』においては、清盛の意に従ったがゆえに子供たちが助かったと書かれている。

淀殿　浅井 茶々（あざい ちゃちゃ）

父・浅井長政や、母・お市の方の仇でもある秀吉の側室になって、秀頼を産むと権勢を誇るも、大阪の陣では戦い方にまで口出しして家康に敗れ、豊臣家を滅亡に追い込んだ女性と言う印象が強い。

しかし、実際の「淀殿」は歴史に翻弄された戦国時代の女性としては、その代表格とも言える、「悲運の女性」でもある。

妹たちが政略結婚などに使われる中、自らは仇とも言える秀吉の側室に上がるが、その時の気持ちはいかがであっただろうか。

『伝淀殿画像』（奈良県立美術館所蔵）

巴御前　戦う愛妾

巴御前

木曾四天王とともに木曽(源)義仲の平氏討伐に従軍し、源平合戦で戦う大力と強弓の女武者である。義仲のために葵御前、山吹御前と競い合うように戦った。

当時の甲信越地方の武士の家庭では女性も第一線級として通用する戦闘訓練を受けている例がある。鎌倉時代にあっては、女性も男性と平等に財産分与がなされていたことからも、女性であれ武者として認められていた。

『延慶本』では、幼少より義仲と共に育ち、力技・組打ちの武芸の稽古相手として義仲に大力を見いだされ、長じて戦にも召し使われたとされる。京を落ちる義仲勢が7騎になった時に、巴は左右から襲いかかってきた武者を左右の脇に挟みこんで絞め、2人の武者は頭がもげて死んだという。

「木曾殿は信濃より、巴・山吹とて、二人の便女を具せられたり。中にも巴は色白く髪長く､容顔まことに優れたり。強弓精兵、一人当千の兵者（つわもの）なり」と記されているという。『平家物語』

便女（びんじょ）というのは、文字通り「便利な女」の意味で、戦場では男と同等に戦い、本陣では武将の側で身の回りの世話や寝所での相手をする召使いの女。
便女＝美女という解説がなされる場合もある。

巴御前

義経の愛妾「静御前」と正妻の「郷御前」

静御前の生年ははっきりしない。讃岐生まれである母の磯禅師は京都で公家を相手に白拍子を斡旋していた。そして静御前もまた、母と同じく白拍子としてあちこちの屋敷へ行っていたのだろう。その後京へ滞在中の義経と知り合う機会があり、愛されて妾になった。

その後、義経との雪の吉野山での悲劇的な別れをする。
そして捕まって鎌倉に送られた後、鶴岡八幡宮に於ける頼朝と政子の面前で、舞いを舞いつつ義経を慕う歌をうたう。こうした点が、静御前の義経を慕う心の純真さと悲劇性を際立たせており悲劇の主人公となっている。

吉野山 峰の白雪 ふみわけて 入りにし人の 跡ぞ恋しき

義経の正室は郷御前で、頼朝の乳母の孫娘であり、頼朝の命で義経の妻となった。
静御前と異なり、彼女は義経を追いかけて、奥州までたどり着いたとされている。
逃亡劇が始まった直後の文治二年（1186年）に娘を産んでいたそうなので、産後の辛い時期に長旅をしていた可能性が高い。しかし、義経が頼みにしていた奥州藤原氏に裏切られて襲撃されると、郷御前も幼い娘も無事には済まなかった。
「もはや、これまで」と最後を見てとった義経は、持仏堂へと入り、郷御前と、4歳になる娘を刺し殺してから、自らも自刃を遂げた。

義経31歳、郷御前22歳・・・

最期までその愛を貫いた義経と郷御前。　戦は多くの悲劇のヒロインを生む。

静御前の墓

文治５年９月１５日（1189年）久喜市伊坂（旧村名、静村）にて悲恋の死を遂げた。
その時、侍女琴柱は遺骸を当時この地にあった高柳寺（現・中田光了寺）に葬り、１本の杉の木を植えそのしるしとした

「源義経公妻子の墓　源頼朝の威圧に依って藤原泰衡が高舘に義経公を襲った。義経公は北の方(郷御前)と幼児を殺害し、自害したと伝えられる。時は平安時代の文治五年（1189年）閏四月三十日、義経三十一歳で最期を遂げた。

平泉町金鶏山にある郷御前親子の墓

蜂須賀家のルーツ（生みの母）のお姫様

その昔、蜂須賀家は尾張国海東郡蜂須賀郷（愛知県あま市蜂須賀）を領した国人で、川並衆であったともいう。

正勝の曾祖父・正永の代までは尾張守護の斯波氏に仕えていたが、斯波氏が衰えたため、正勝の父の正利の代には蜂須賀郷に200貫を領し、美濃国の斎藤氏に従ったとされている。

その正利の妻であり正勝の母は、「尾張群書系図部集」には「大橋定広の女」とあり「蜂須賀家記」に依ると「大橋定広の娘」以外の某氏とされている。（大橋氏は津島の豪族）

また一説に依れば、正室または側室の安井御前であり正勝が6歳の時に亡くなったという。

その正勝の生みの母とも言われている安井御前とはどの様なお姫様だったのだろうか。

村目比村蜂須賀村蜂須賀村ノ内亦花木中嶋ニ分ル

正利公

蜂須賀小六後藏人ト云蜂須賀邑ニ生母公者氏未知始メ氏ヲ濱（一作波間是池田玄虎ノ傳ト云）齋藤山城守道三ニ屬シテ斎藤小六ト云蜂須賀ノ邑ヲ領ス二百貫（一三百メ二作ル）傳不詳蜂須賀ノ邑ヨリ

一且宮ノ後ノ邑ニモ移居スト云〻

一説正利公出家有テ名竜空禅師ト云世歳ニテ還俗ト云〻天文廿二癸丑年二月十五日逝秀月正定禅定門ト号ス光明院ニ位牌アリ（一説摂州難波安住寺ニモ亦有位牌）

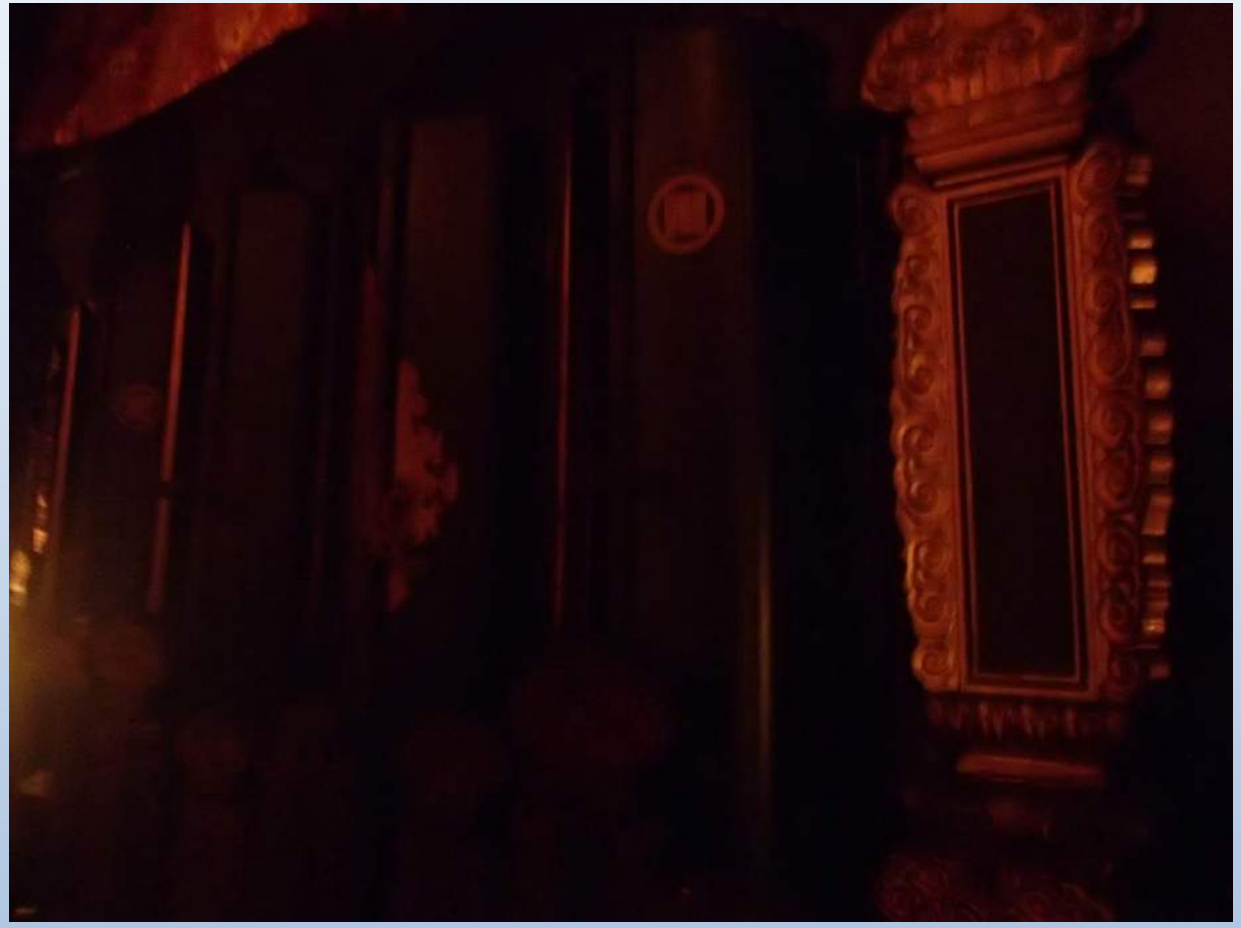
付紙

屬織田信長公稱蜂須賀藏人

夫人

氏未知光明院ニ元秀慶本禅定尼永禄十二年廿日トアリ月ナシ又高鑒宗養禅定尼天正十二年十五日是又月ナシ此二牌ハ前後ニ夫人ノ位牌ナラン青山傳曰正勝公ハ前ノ夫人ニ生レ賜正元公ハ後ノ夫人ニ生賜并正信公於墨女ハ前ノ夫人ニ從来ル青女名シヤクト云ニ出生ト云〻

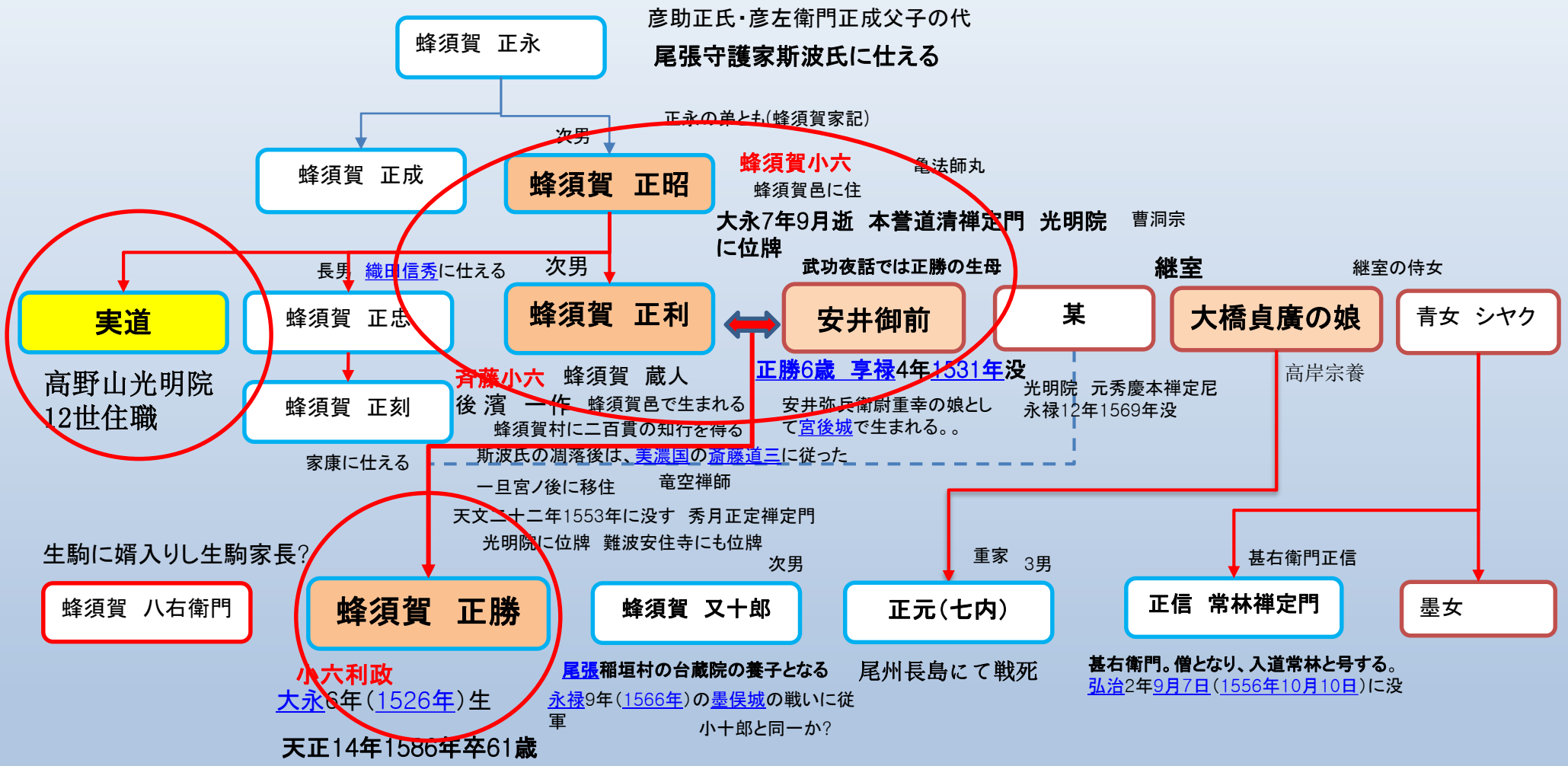
1568年
正勝42歳



高野山　光明院　蜂須賀家代々の遺骨を納め、蜂須賀家の大きな位牌が並んでいる。

徳島城から移された襖絵が素晴らしい。

正勝の生母について



蜂須賀正勝の母は、「尾張群書系図部集」には「大橋定広の女」とあり
「蜂須賀家記」に依ると「大橋定広の娘」以外の某氏とされている。(大橋定広は津島衆の長)
また、宮後城(安井御殿)の安井御前とも言われている。

蜂須賀正勝の生母　安井御前

蜂須賀正勝は、1526年、蜂須賀城主・蜂須賀正利(200貫)の長男として誕生。
(200貫とは→約50町→約15万坪の領地)
一貫　＝ 1000文(匁)　＝ 2石　　戦国時代は貫　秀吉検地後　石

母は宮後城主・安井重幸(安井弥兵衛、安井弥兵衛尉重幸)の娘・安井御前とも勝が6歳の時に亡くなり正勝は継室の大橋定広の娘に育てられた。

蜂須賀正勝は1553年に、父正利と共に織田信秀に追われて蜂須賀村を出て、母の故郷・宮後城(江南市宮後町)に移り、美濃の斎藤道三に仕えたとされる。

その後、斎藤道三が1553
去って尾張岩倉城
3kmと近い、小折(愛
此の頃、信長は愛妾の生駒吉

川並衆は川舟や馬を使って運送業を営んだり、有力商人の商品輸送の用心棒をしたりして利益を得、織田信長から国中通り抜けの特権を与えられた

そこで、蜂須賀正勝は「川並衆」と言う独立勢力を束ねて行くようになる。
1554年に養子の東獄、1558年に実子の家政が誕生しているので、正室の大匠院(松、まつ)と結婚したのも、宮後城に移った頃とも考えられる。

その後、犬山城主・織田信清と渡り歩き、　1564年に織田信清が織田信長に攻められて、尾張から追い出されると、織田信長に仕えたと言われている。

太平記英勇伝の蜂須賀小六正勝像

蜂須賀正勝の実像

正勝の生母　安井屋敷のお姫様とは

武功夜話　　尾州河内川並衆蜂須賀党の覚え

　ここに尾州上の郡丹羽郡稲木荘前野村、乾方八町先宮ノ後村なる処あり。安井屋敷内に寓居仕る勇侠蜂須賀小六なる者あり。

　この家元は、尾州海東郡蜂須賀村なり。（略）　親蔵人の代、織田信秀様と隙あり。

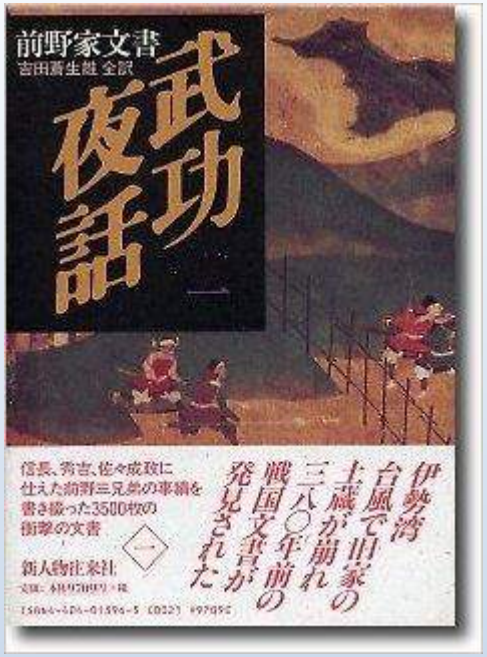
　蔵人亡き後蜂須賀の郷退去、お袋様御在所なる尾州上郡宮後村安井弥兵衛の家へ退れ、寓居罷りあり候ところ　（後略）

安井屋敷（宮後城）

　南北80有余間（153M）、東西60有余間（117M）、乾（西北）の方位には大竹林、馬隠し場、辰巳（南東）の御土居内に八幡社今にあり。約5000坪

　誠に広大堅固の構えである。この節所に安井小次郎なる者、目代（城主）として入れ置かれ、その後安井弥兵衛が代々住居した。

　安井屋敷に蜂須賀小六正勝殿が住まわれていたのは天文（22年）のころであった。



『武功夜話』は、前野家文書と呼ばれる家伝氏利用資料である。

前野家文書は、　愛知県江南市の旧家吉田家に、先祖であると称する前野氏の歴史をまとめた書物として伝わっているもので、1959年（昭和34年）の伊勢湾台風で蔵中に入水し、中が露見して見つかったと称する。

前野家の縁者で豊臣秀吉に仕えて大名にのぼった前野長康（坪内光景）や、前野家と関係の深かったという蜂須賀氏、生駒氏などののちの大名家、そして生駒屋敷に出入りしていたという織田信長や豊臣秀吉の青年時代、桶狭間の戦いや墨俣一夜城の築城といった蜂須賀家に関わりのある重要な事件について、類書には見えない情報を伝える。

偽書とも言われるが、貴重な資料であることには間違いがない。

安井屋敷（宮後城）

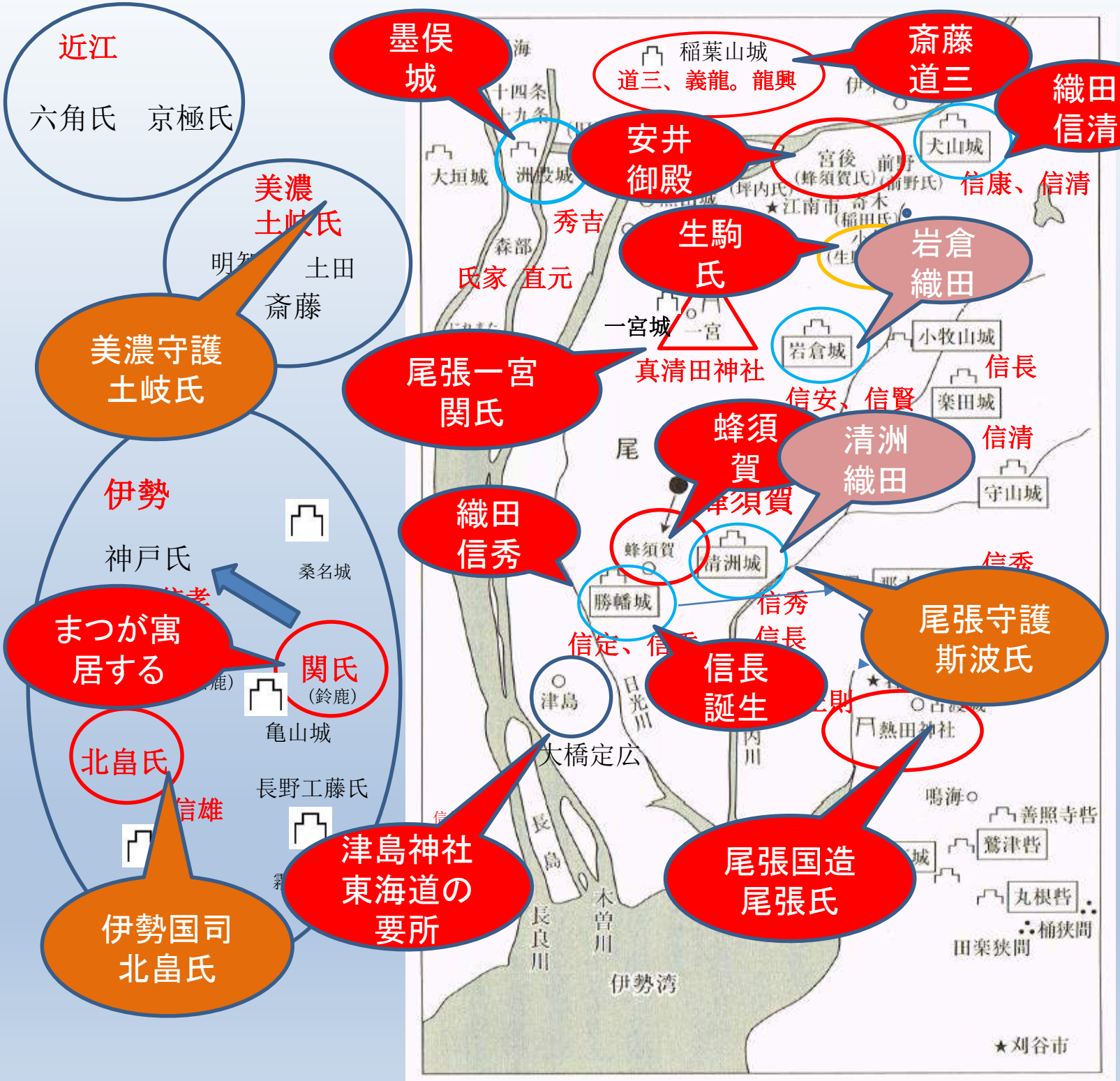
また、武功夜話には正勝は永禄（1558年～1570年）の頃まで居住したとある。

天文22年(1553年)、父正利と共に安井御殿に移り住み、正利死後の1566年有名な墨俣一夜城で活躍した後、信長が稲葉城を落として岐阜城を築城した永禄10年(1568年)に岐阜城下に移住したと見られる。

また、秀吉が長浜城の城主となった1575年の頃、蜂須賀正勝(48歳)は秀吉から城下に住むことを許され、伊勢長島に1000石、近江浅井郡に600石の合計1600石の領主となった。

蜂須賀氏系譜等に、正利が一時宮ノ後に居住したことや、正勝の妹で梶原藤六正範の室が宮ノ後の御女であり、その時正利が宮ノ後に居たと記されている。

また、東岳禅師が曼荼羅寺で仏門に入ったり、家政が曼荼羅寺で勉学に励んだ事、そして家政が阿波の藩主となった後、宮後八幡宮や曼荼羅寺の正堂を寄進、再建した事などから、正利や正勝そして家政が宮ノ後の安井屋敷に一時居住していた事は間違いないと思われる。



室町時代、守護代・織田氏は二家に分かれる。

岩倉城を居城とし、丹羽、葉栗、中島、春日井の上四郡を領有する岩倉織田氏と、清洲城に拠り、下四郡（海東・海西・愛知・知多）を領する清洲織田氏である。

前者を伊勢守系といい、後者を大和守系と称した。

守護　斯波氏

守護代

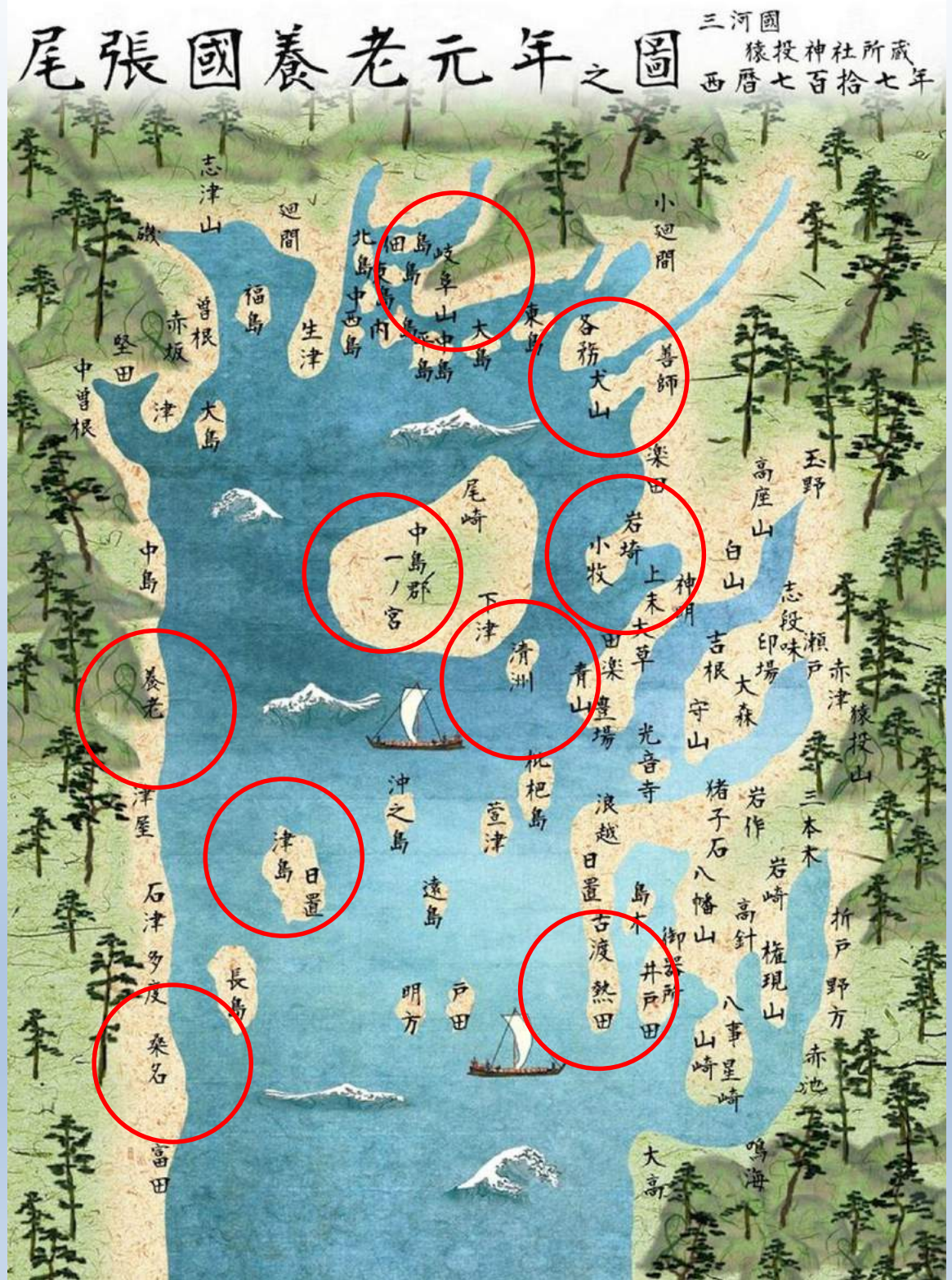
清洲織田氏　岩倉織田氏

配下　清洲三奉行

因幡守家　織田広延–織田信友

藤左衛門家　織田信氏–織田忠辰

弾正忠家　織田信秀–織田信長


尾張國養老元年之圖
三河國
猿投神社所蔵
西暦七百拾七年
志津山
迴間
磯
福島
生津
曽根
赤坂
堅田
中曽根
津
犬島
北島
中西島
田島
岐阜山
中島
大島
東島
小迴間
各務犬山
善師
楽田
高座山
玉野
尾崎
中島郡
一ノ宮
岩垰
小牧
上末
白山
神明
志段味
瀬戸
印場
吉根
大森
赤津
猿投山
下津
清洲
田楽
青山
大草
豊場
守山
養老
光音寺
枇杷島
沖之島
萱津
浪越
日置
猪子石
岩作
三本木
岩崎
津屋
津島
日置
遠島
島木
八幡山
高針
石津
多度
長島
明方
戸田
古渡
熱田
御器所
井戸田
権現山
折戸
野方
八事
星崎
山崎
赤池
桑名
富田
大高
鳴海

尾張古図

717年

安井御前と蜂須賀正勝そして浅野長政、更に豊臣秀吉

「安井御前」の父は尾張宮後（みやうしろ）城主・安井重幸。

常陸真壁藩初代藩主・浅野長政（浅野長吉）は、安井重幸の長男の安井重継（安井御前の弟）と、母（浅野長詮（ながあきら）の娘）の間に生まれる。

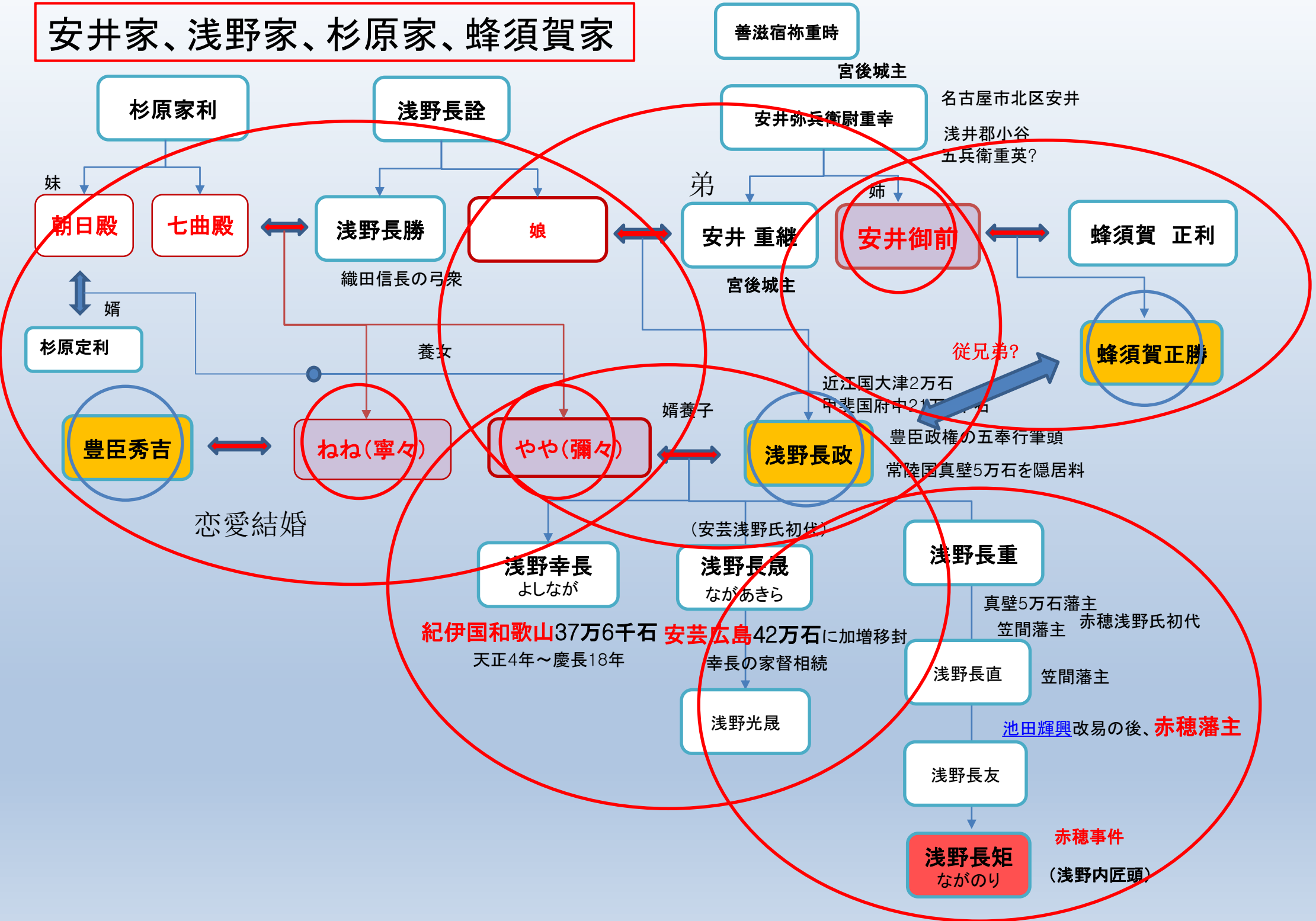
父・安井重継は、甥である蜂須賀正勝に家督を譲り、安井家は蜂須賀家へ吸収され、安井屋敷は蜂須賀屋敷と呼ばれるようになる。

長政は、織田信長の弓衆をしていた叔父・浅野長勝（母の弟）に男子がなかったため、浅野長勝の娘・やや（彌々、長生院）の婿養子として浅野家に迎えられ、のちに浅野家の家督を相続した。養母は七曲殿。

この浅野家には、浅野長勝の養女となっていた、ねね（おね、寧々、のちの北政所、高台院）がおり、木下藤吉郎（後の豊臣秀吉）に嫁いでいる。

その縁で、浅野長政は、豊臣秀吉にもっとも近い姻戚として、織田信長の命で豊臣秀吉の与力となった。

安井家、浅野家、杉原家、蜂須賀家



戦乱の世、正勝、家政を支えたお姫様

まずは、正勝の正妻である大匠院「まつ」。
「まつ」の出自は不詳であり謎に包まれている。

蜂須賀家記など多くの古文書では、父は尾張の豪族益田持正とされている。尾張群書系図部集でも益田の女と記されている。

しかし、武功夜話では秀吉の家来の三輪吉高の女であり宮後八幡社々家三輪若狭の妹とされている。

また、伊勢の関家に由縁の真清田神社・真清田（益田）持正の女との説も一部にある。

伊勢国の北畠氏に仕えていた関正康・長重父子が、熱田神宮の力を借りてこの地に移り住み、真清田神社の神官となった。一宮城は社領を守る為に築いたといわれる城。
北畠家を追われたまつは、正勝との前一時伊勢の関家に依っていた。

関長重（十郎右衛門尉）は伊勢国北畠氏の後、織田信長に仕官する。

尾張一宮真清田神社と一宮城　関氏との関係

関氏は平重盛の子孫といわれ、伊勢国の北畠氏に仕えていた関正康・長重父子が、熱田神宮の大宮司の力を借りてこの地に移り住み、真清田神社の神官となった。

熱田神宮と草薙剣

三種の神器の1つである草薙剣（くさなぎのつるぎ）　を祀る神社として知られる。
大宮司職は代々尾張国造こくぞうの子孫である尾張氏が務めていたが、平安時代後期に藤原南家の藤原季範すえのりにその職が譲られた。この季範の娘は源頼朝の母（由良御前）である。

真清田神社

尾張国一宮である真清田神社は古来多くの社領を有したが、それらは「真清田荘」として荘園化し、平安時代末には社領は水田129町9反300であった。その後天正12年（1584年）には大地震で社殿が崩壊し、1591年には秀次の検地際のイザコザから豊臣秀吉が神人達の職を廃し散逸させ、社領も没収されて社勢は衰えたという。その後江戸時代に再興した。

一宮城

一宮城は真清田神社の神官・関長重が社領を守る為に享禄年間（１５２８～３２）に築いたといわれるお城で、関康正、長重、長安の三代の居城となった。
そして、関長重の息子・長安は、織田信長に従い、本能寺の変の後は織田信雄の家臣になり、小牧・長久手の合戦(1584年)時、岩崎城（日進市）攻めの後、池田恒興や森長可と共に長久手で戦死している。

真清田神社

　真清田神社は、平安時代、国家から国幣の名神大社と認められ、「尾張國一之宮」として、国司を始め人々の崇敬を集めました。
　御祭神は天火明命（あめのほあかりのみこと）で、鎌倉時代、順徳天皇が多数の舞楽面（ぶがくめん・舞楽に用いられる仮面）を奉納しました。
　その舞楽面は、重要文化財として保存されています。

蜂須賀氏系譜　正勝夫人松

まつの父
益田惣右エ門は尾州にて3千石を領す。

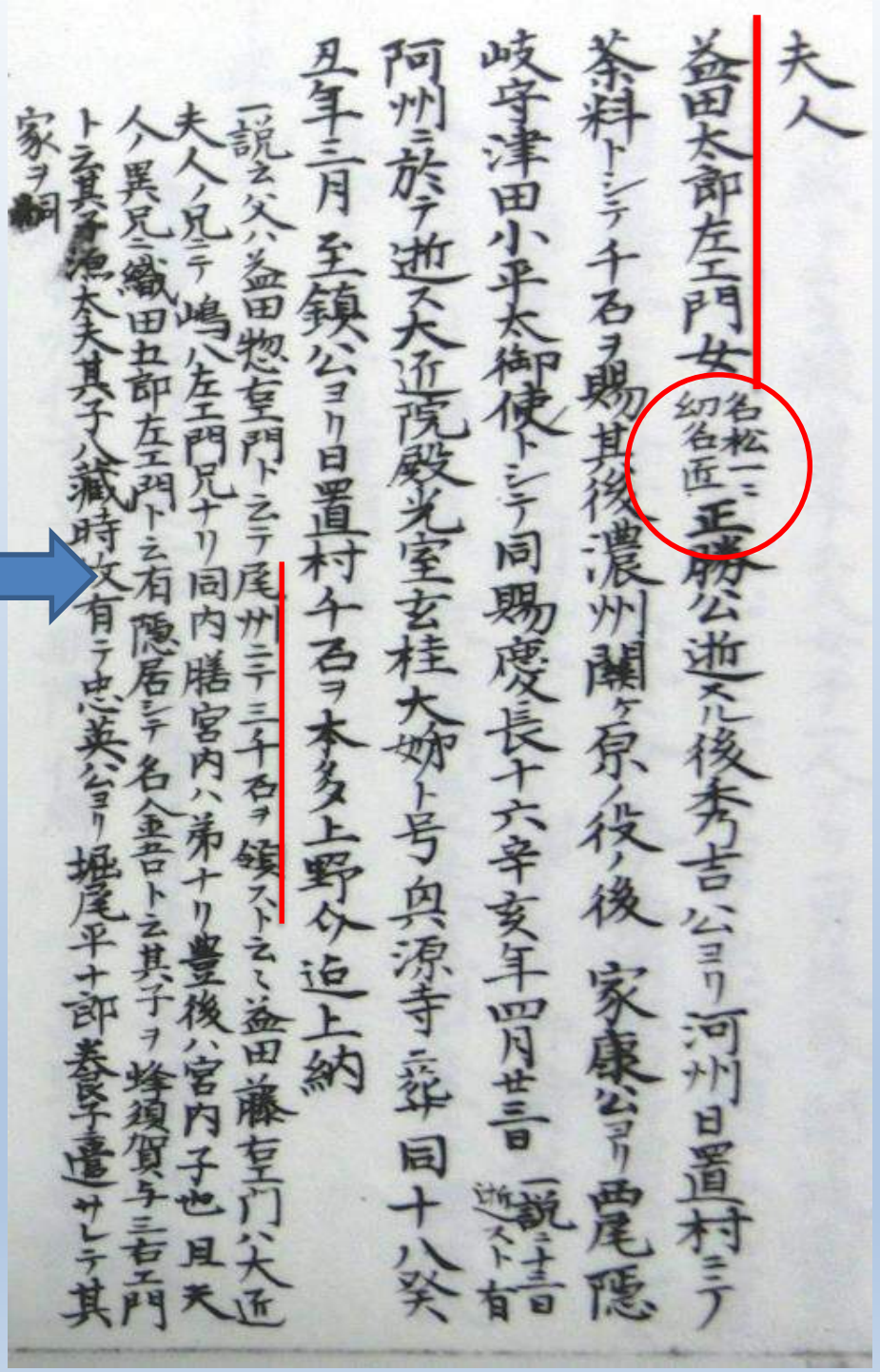
益田藤右エ門は兄。

嶋八左エ門は兄。

内膳、宮内は弟。

異兄に織田五郎左エ門(金吾)。

3000石と言われる
益田庄が尾張の何処
にも見受けられない
のが不思議



夫人
益田太郎左エ門女　名松一ニ幼名匹　正勝公逝スル後秀吉公ヨリ河州日置村ニテ
茶料トシテ千石ヲ賜其後濃州關ヶ原ノ役ノ後　家康公ヨリ西尾隠
岐守津田小平太御使トシテ同賜慶長十六辛亥年四月廿三日　一説ニ十三日逝スト有
阿州ニ於テ逝ス大近院殿光室玄桂大姉ト号奥源寺ニ葬　同十八癸
丑年三月　至鎮公ヨリ日置村千石ヲ本多上野介迫上納
一説ニ父ハ益田惣左門ト云テ尾州ニテ三千石ヲ領スト云ヒ益田藤左門ハ夫近
夫人ノ兄ニテ嶋八左エ門兄ナリ同内膳宮内ハ弟ナリ豊後ハ宮内子也　且夫
人異兄ニ織田五郎左エ門ト云有隠居シテ名金吾ト云其子ヲ蜂須賀与三右エ門
ト云其子源太夫其子八藏時文有テ忠英公ヨリ堀尾平十郎養子遣サレテ其
家ヲ嗣

斯波修理太夫持種
大野斯波家
益田氏系図
益田宮内小輔 持正
益田惣右エ門、太郎左エ門
4男4女大永7年1527年没
益田荘にて3000石
5000石
別腹兄
兄
大匠院の弟
天正13年
大匠院の兄
撫養城代
妹
持長
五金
益田宮内充 一正
益田内膳正 正忠
大匠院
学伝殿
奈良君
織田家に被養
一宮城代
関ヶ原で至鎮と共に出陣
5577石
1604年没
5000石
3男
初名 益田左兵衛
海部城代
益田豊後 長行
益田大膳正 豊正
撫養城代
政利？
鳩内膳 正順
1000石
慶長10年1605年 父 正忠隠居料相続
250石
正順次男
賀島長昌の娘を娶る
鞆城代
1633年寛永10年大粟山被召込
1648年
正保3年死亡
1600年 慶長14年3月没
益田飛騨守 正長
5000石
撫養城代
1000石
仁尾清右衛門貞久
益田 式部
豊後弟
正保3年丈六寺切腹
益田 右京
式部子
正保3年丈六寺切腹
益田 帯刀
式部二男
正保3年丈六寺切腹
益田 源蔵
式部三男
正保3年丈六寺切腹
益田 外記
寛永10年海部山被召込
正保3年大安寺切腹
益田 籐七
正保3年大安寺切腹
益田豊後 長行の姉の娘
は長谷川越前真恒に嫁ぐ
母は牛田掃部助一長の妹
正忠次男
1638年
寛永13年禄被召上
寛文4年没
酒の上不心得有
板野郡姫田村蟄居300石
1664年
初名 益田 鳩
（二才）
仁尾大膳 貞年
興源院様代召出 250石
仁尾六郎左衛門数信
興源院様代相続
御国奉行
1000石
土組頭
大阪御留守居役
元禄10年没 250石
仁尾右京 永儒
1000石
正保3年1648年召出
洲本在番 裁許御奉行
仕置
稲田頼母 朝蕘
仁尾官右衛門定信
初名 仁尾 勘十郎
南崇院様（光隆）代相続
元禄元年新町出火組裁判不宜
清右衛門の娘の子
元禄10年養子相続
浅野内匠頭家臣
近松小右衛門行生4男
仁尾右京 永栄
1000石
洲本御仕置御用
享保7年隠居
元禄5年相続
江戸在番 250石
1000石
仁尾内記 永息
益田 因幡
仁尾孫三郎定勝
享保7年相続
洲本御仕置御用
享保6年養子相続

まつの父かもしれない「三輪吉高 」とは

奈良の大神神社主家は、大神姓で三輪氏であった。

中世に至って、高宮氏と改めている。

その祖は大国主命といい、大田々根子命の後裔と伝える。崇神朝に大神君姓を賜り、のちに三輪君に改め三輪氏を称するに至ったという。

以降は、嫡流は大神主として神事を務めたが、一族には武士となり、三好氏・北畠氏などに仕えている者もいた。

一説によると、まつは父の三輪吉高が北畠具教の家来であった事から、具教の側室となったとされている。
ともの り

三輪吉高(秀次の父の三好吉房の義兄弟)は文禄元年1592年犬山城主となったが、文禄4年の秀次事件で秀次に連座して三好吉房と共に失脚となった。
同時に正勝の義兄弟の前野 長康は子の景定と共に自害を命じられた。

まつは、北畠 具教とものりの側室？

蜂須賀家記考異によると、「まつ」は伊勢の国司北畠 具教の寵を得て側室となるが、子（東岳禅師）を妊った為、正妻北の方（六角定頼の娘）の恪気を避けて北畠具教の元を去り鈴鹿中河原　関氏に依る。

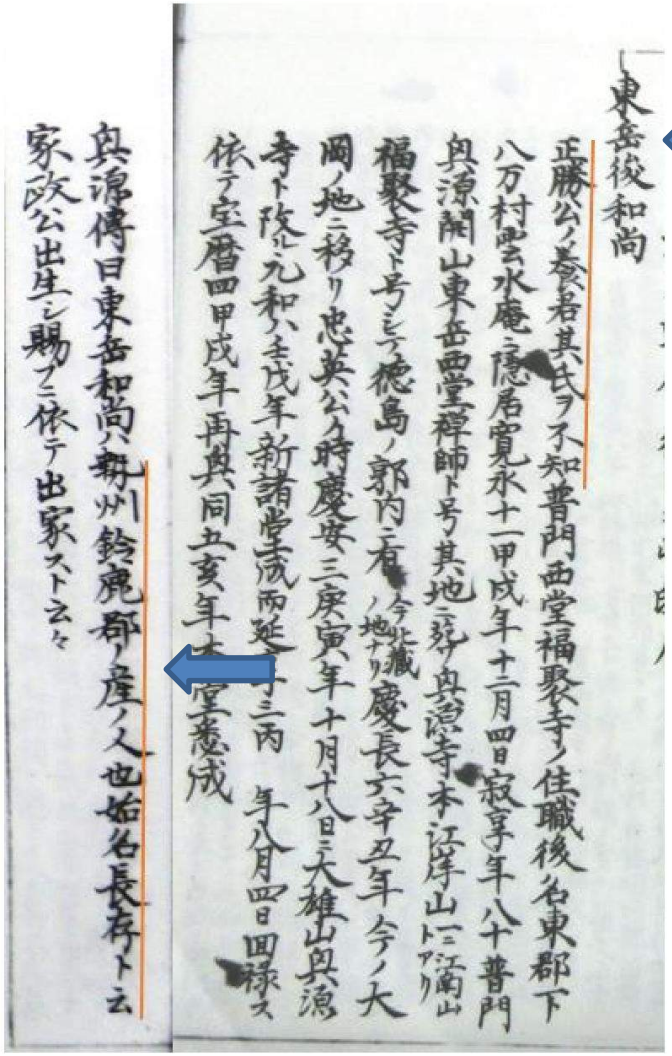
弟の益田内膳等の取り計らいで天文 12 年（1553 年）、15歳で29歳の蜂須賀正勝の正室となり、明けて天文 13 年（1554 年）東岳禅師、そして永禄元年（1558 年）家政を宮後城で産む。

家政は、小さいときに三輪氏の旦那寺である曼陀羅寺山内の梅陽軒(現在の本誓院)へ預けられ、昌運上人を師と仰いで、学問修行に励んだとされている。

本誓院には、家政の位牌や当時の手習い机が保管されている。

東岳禅師

蜂須賀家記



東岳後和尚

正勝公ノ養君其氏ヲ不知普門西堂福聚寺ノ住職後名東郡下八万村雲水庵ニ隱居寛永十一甲戌年十二月四日寂享年八十普門與源開山東岳西堂禪師ト号其地ニ葬ル與源寺本江岸山ニ江南山福聚寺ト号シテ徳島ノ郭内ニ有今北藏ノ地ナリ慶長六辛丑年今ノ大岡ノ地ニ移リ忠英公ノ時慶安三庚寅年十月十八日ニ大雄山與源寺ト改ル九和八壬戌年新諸堂成而延享三丙寅年八月四日四禄ス依テ室暦四甲戌年再興同五亥年大堂悉成

與源傳曰東岳和尚ハ勢州鈴鹿郡ノ産ノ人也始名長存ト云家政公出生ニ賜フニ依テ出家スト云々

蜂須賀氏系表考異

「師小字鶴千代姓源蜂須賀郷人母益田氏、勢州国司北畠左中将具教之愛妾也既妊師具教与之良刀曰我以賜腹中之子也、益田氏受之出、寓鈴鹿中河原関氏時蜂須賀正勝公無室、斉藤某益田内膳等相議為利政公娶之天文二十三年産師、永禄元年又生一子即家政公也

師総角従父有軍功播英豪之佳名織田信長褒賞之乃手賜短槍曰利政得英子矣師十七歳有鹿之志請父以家政公為長嫡自取仲子之礼投曼荼羅寺削髪名長存後号東岳又改今名。

〔読み下し文筆者〕

師、小字は鶴千代、姓は源、蜂須賀郷の人なり。母は益田氏、勢州の国司、北畠左中将具教の愛妾なり。既に妊師を妊る。具教これに良刀を与えて曰く、われ以て腹中の子に賜うなりと。益田氏これを受けて出で、鈴鹿中河原、関氏に寓す。時に蜂須賀正勝公、室なし。斉藤某・益田内膳等相議して、公にこれを娶らしむ。天文二十三年、師を産む。永禄元年、又、一子を生む、即ち家政公なり。

師、総角（少年）にして父に従い軍功あり、英豪の佳名を播く。織田信長これを褒賞し手づから短槍を賜いて曰く、利政（正勝）、英子を得たりと。師、十七歳にして出塵（出家）の志あり、父に請い家政公を以て長嫡となし、自ら仲子之礼を取り曼荼羅寺に投じ、削髪して長存と名づく。後東岳と号し、又、今の名に改む。

牛田義文　史伝蜂須賀小六正勝

正勝との慌ただしい結婚生活

正勝は斉藤道三亡き後、岩倉の織田信安（長男信賢）に仕えたが、同年の浮野合戦で大敗した後は宮後に居を構え、生駒氏、前野将右衛門と共に信長、秀吉と主従の縁を結んだ。

その後、正勝は秀吉と共に戦に明け暮れて各地を転戦し、ゆったりとした結婚生活とは無縁だったと思われる。長浜に居を構え、その後龍野城の城主となってからも毛利攻めなどで忙しく、殆ど「まつ」とは一緒に過ごす時間はなかっただろう。

戦国武士の妻として「まつ」がどの様な暮しをし、戦国の世を駆け上っていく正勝を如何に支え、家政を育てたのだろうか。

天正13年家政が阿波藩藩主となった後、正勝が、大坂屋敷で余生を過ごした時には、やっと平和な夫婦生活を送ることが出来たのかもしれない。しかし、その平和な生活も長続きはせず正勝は天正14年労咳で没する。

その後、徳島城に入り、子の家政とその妻「ひめ」そして孫の至鎮とその正室「氏姫」等と一緒に幸せな余生を過ごしたと思われる。

そして慶長16年（1611年）大坂冬の陣の前に没。法名は大匠院殿光室玄圭大姉。

始めは、子の東岳禅師が住職を務める福聚寺に葬られたが、夫・正勝の墓とともに興源寺に移された。

元和 9 年（1623 年）勝浦郡宮井村（現在の徳島市多家良町）に大匠院の十三回忌に伴い息子・家政が大匠寺を創建した。現在でも荘厳な禅寺の大匠寺に念持仏である聖観音菩薩像と共に、位牌が祀られている。

また美馬市にある本楽寺の本堂（阿弥陀堂）にも大匠院の霊位が祀られている。

ちなみに、阿波九城の城代、益田宮内（一宮、鞆）、内膳（撫養）は「まつ」の兄弟だとされている。

まつは三輪吉高の娘か？　益田持政の娘か？　私考

　三輪は元は大和の大神神社の神官であり、子孫の三輪吉高は宮後八幡宮の社家である。「まつ」は、三輪吉高の娘として生まれて主家であった北畠具教に仕える。

　また、真清田郷の尾張一宮神社である真清田神社の社家は大三輪氏系真神田氏。三輪吉高とは遠戚にあたる。

　真清田神社の守護城である一宮城の城主・関氏は、平重盛の子孫で、伊勢関氏の一族であり一宮城はその関氏が社領を守るためこの地に構えた城。

　関長重の息子関長安（成政）の一族が真清田神社の神官または一宮城の武士であり、真清田氏と名乗っていたのではないだろうか。

　北畠家から追い出されたまつは、三輪氏の遠戚であり真清田氏の縁戚でもある伊勢の関家に寓居する。そして内膳の計らいで真清田氏（持正）の養女として正勝に嫁ぐ。

　信長の伊勢攻めの後、伊勢の関一党は、次々と信長に降り、離散に追い込まれていった。
　また、長久手の戦いで関長安が死亡し、太閤検地のイザコザで真清田神社の神人が散逸した後、真清田一族の何人かは益田氏と名を変え豊臣秀吉に仕える。

　その後、正勝等と共に四国攻めに参加し、持正の子の宮内や内膳が阿波九城の撫養、一宮城の城代となる。家政が阿波に入った後、まつの兄弟（義兄弟）として蜂須賀家に仕える。

　三輪吉高は秀次に仕え犬山城城主となるので阿波には来ない。

そして、家政の正室「ひめ」

「ひめ」は永禄6年（1563年）尾張の豪族小折城主生駒家長の女として生まれる。

織田信長の側室「吉乃」は家長の妹であり、「ひめ」の叔母となる。

生駒氏は藤原良房の子孫で、灰や油の商いと馬借で冨を築き、小折城と呼ばれる家屋敷を構えた武家商人であり、秀吉や織田信長などが屋敷に出入りしていた。

正勝は川並衆として生駒家の物資の運輸の警護などをしていたとも言われている。（荏胡麻油を飛騨へと運び、帰りに草木の灰を仕入れてくる。草木灰は肥料になるとともに草木染めの触媒となる）

また、正勝の兄の八右衛門が生駒家の女の婿養子となって生駒家の商売を継いだとの説もある。

その生駒家でその名の通り「姫」として大事に育てられた「ひめ」がどの様にして家政に嫁いだのか。

生駒氏とは

生駒氏は藤原良房の子孫で、灰や油の商いと馬借で冨を築き、小折城と呼ばれる家屋敷を構えた尾張国丹波郡小折の土豪。

武家商人として飛騨国から三河国まで広範囲の商圏を有し、犬山城主・織田信清に属していた。

その後、夫の土田弥平次が戦死したため実家に戻っていた生駒家宗の娘・類（吉乃）が織田信長の側室となったことにより、信長に仕え重用された。

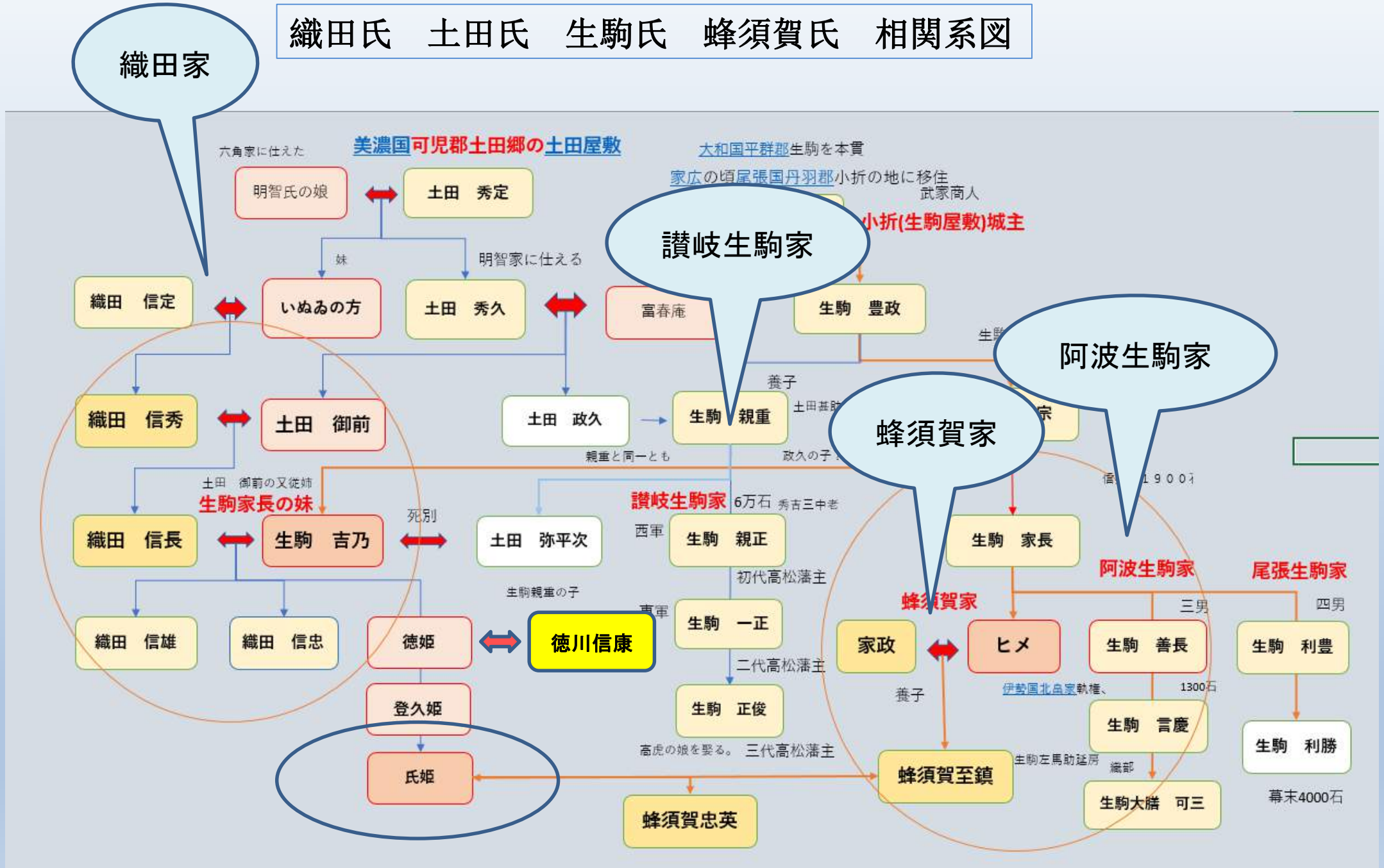
屋敷は遠方から多種多様な人の集まる場所となっており弾正忠家の信長は生駒氏の財力と情報力を求めて近づいたのかも。

またその時生駒家の小間使いだった秀吉が、信長に仕えるきっかけとなったと言われている。

生駒家宗は弘治2年（1556年）死去。子の家長は信長に馬廻りとして仕えた。

家長の三男　生駒善長は織田信雄の嫡男秀雄に仕えた後、松平 忠直に仕え、その後徳島藩中老、阿波生駒家の祖となる。

織田氏　土田氏　生駒氏　蜂須賀氏　相関系図



ひめ、家政に嫁ぐ

家政は長篠の戦いを経て、中国攻めの際、秀吉の旗本・黄母衣衆の一員となり、播磨広瀬城攻め、羽衣石城の救援などで活躍。

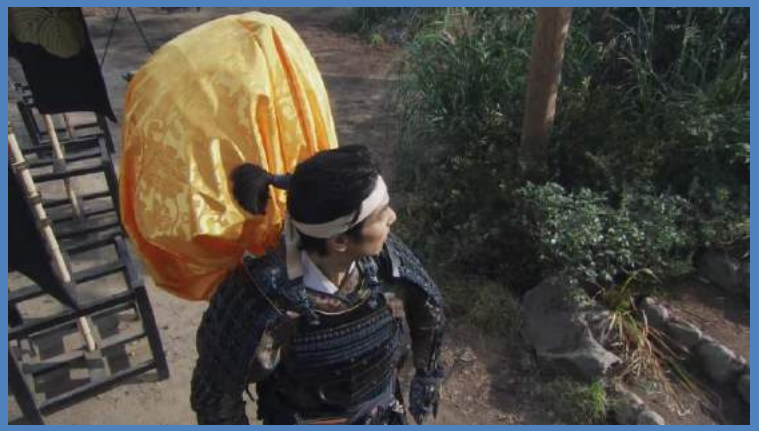
し戦っ

室

ど、

を与

勝



真田丸　**堺雅人が演じる**真田信繁(幸村)の黄母衣

豊臣**秀吉**が馬廻(親衛隊)から選抜した武者で、武者揃えの際に名誉 となる黄色の母衣指物の着用を許された者。

織田信長が近習の使番から精鋭として黒**母衣衆**と赤**母衣衆**を選んだことに倣ったといわれる。

正勝、家政が戦に奔走している間、蜂須賀家を守った「まつ」そして「ひめ」はどの様にして戦国の世を生きたのだろうか。

長男・蜂須賀至鎮を出産

天正13年家政と共に阿波国に入った「ひめ」は天正14年（1586年）阿波一宮城で家政との間に長男・蜂須賀至鎮を出産する。

（実は家政はその前に側室との間に兼姫をもうけている。）
その後、家政は側室との間に三人の姫（万、阿喜、辰）をもうける。

ひめは慶長11年（1606年）没する。享年43歳。法名は慈光院殿松嶺玄寿大姉。

義母のまつ（慶長16年（1611年）没）より早く亡くなった事になる。

慈光院の没後、弟の生駒善長は家政の家来になり、中老阿波生駒氏として明治維新まで蜂須賀家に仕えることとなる。

墓所は福島にある慈光寺。

この慈光寺は息子である至鎮が八万町中津浦に創建したが、母の死を期に寺を現在地に移設し慈光寺と名を改めた。

政略結婚に翻弄されるも健気に生き抜いたお姫様

まずは、蜂須賀正勝の娘「糸姫」。

糸姫は、蜂須賀正勝の娘であり、徳島城を築城した藩祖　蜂須賀家政の妹だ。

天正１２年(１５８４年)1月、11歳の糸姫は17歳になる黒田官兵衛の長男、後の福岡藩初代藩主黒田長政の妻となる。

二人の結婚は、天下人とならんとする豊臣秀吉による政略結婚であった。
子のない秀吉は、この正勝の娘を養女格として、長政に嫁がせた。

天正10年に信長が本能寺で自決後、秀吉が賤ヶ岳での勝利により信長の後継者としての地位を固めた激動の時代の真っ最中の縁組みである。

秀吉としては、最も信頼できる家来である蜂須賀家と黒田家を縁組みさせる事により、より強固な主従関係を構築しようとしたのだろう。

この頃長政は、賤ヶ岳の戦で功をあげ河内国に450石を拝領し、更に小牧・長久手の戦いでは父・黒田官兵衛と共に大坂城の留守居を務めた。そして、根来・雑賀の一揆を鎮定した武功により、2000石を与えられている。

糸姫、長政と離縁

天正15年（1587年）の九州平定では、長政は日向財部城攻めで功績を挙げた。
戦後、父親の孝高(よしたか)に豊前国中津に12万5000石が与えられた。この頃、長政と共に糸姫も中津に移り住んだのだろうか。

糸姫は長政とは14年もの長い期間、仲むつまじい夫婦生活を送る。糸姫にとっては幸せな時期だったのだろう。

二人の間には一人の姫(菊)が生まれる。
しかし悲しいことに世継ぎの男子が産まれなかった。

慶長３年（1598年）秀吉が逝去すると情勢は一変。

石田三成らと対立を深めていた長政は、福島正則、加藤清正らとともに徳川家康に接近。

家康の養女である「**栄姫**」を継室に貰い受け、正室の糸姫を離縁してしまう。

（此の直ぐ後、蜂須賀至鎮が氏姫を娶る。）

糸姫、実家の蜂須賀家へ戻る

　離縁された糸姫は一人娘を残して泣く泣く実家の蜂須賀家へ戻ることになる。
　残された菊姫は、その後、黒田家の家臣、井上九郎右衛門の息子のもとへ嫁いでいる。

　「糸姫」との離縁が、江戸時代中期までの黒田家と蜂須賀家の127年に渡る「**不通大名**」のきっかけとなったと言われている。

　糸姫はその後、実家の阿波国で暮らし、孫である忠英にも大事にされて静かな老後を送る。

　正保2年（1645年）に死去。戒名は寶珠院殿桃渓僊公尼大姉。
　母親の白雲院と共に、眉山山麓の桃渓山臨江寺に静かに眠っている。

大河物語　軍師官兵衛の長政と糸姫

糸姫の姉「奈良姫」。

奈良姫（～ 慶長 11 年（1606 年））は糸と同じく正勝の側室白雲院から生まれる（正室まつが母とも？）。

尾張三淵村領主、中山源八郎直親に嫁いでいたが、直親が元亀元年（1570 年）の金ヶ崎の戦いで討死したため離縁となった。

その後、織田信長の家臣であった賀島長昌（後の阿波徳島藩家老）の正室となる。

長昌との間には、元亀 3 年（1572 年）に賀島政慶まさよし(牛岐城代 1万 石)をはじめ、3 人の娘（山田宗登室、益田長行室、益田正高室）を儲けた。

奈良姫は慶長 11 年（1606 年）阿波富岡で死去。
墓所は夫長昌と共に阿南市にある本覚寺。

奈良姫の生涯は、あまり目立たないが波乱万丈であったと思われる。

初期藩政の確立期に活躍する姫様

「氏姫（敬台院）」

徳川家康の長男「松平信康」と、織田信長の娘「徳姫」との間に生まれた娘「登久姫」と、信州松本藩の初代藩主「小笠原秀政」の間に生まれる。幼名を「万姫」「お虎」と称し、やがて徳川家康の養女となって、伏見城に移る。

秀吉の死後、その遺言によって豊臣秀頼は伏見城から大坂城に移り、代わって五大老筆頭の徳川家康がこの城に入り政務をとった。

「氏姫」が家康の養女となり、伏見城に入ったとされるのはこの頃だろうか。

木幡山伏見城は、1600 年 8 月に行われた関ヶ原の戦いの前哨戦である伏見城の戦いで落城した。

「氏姫」は伏見城落城寸前、9 歳のときに徳島藩初代藩主蜂須賀至鎮に嫁いで、徳島藩第二代藩主蜂須賀忠英そして三保姫（岡山藩第二代藩主池田忠雄の正室）と萬の方を生む。

家康は大名同士の婚姻を勝手に行ってはならないとする秀吉の遺言を破り、福島、黒田、伊達らにも縁組を斡旋した。

関ヶ原の戦いの直前、蜂須賀家政（蓬庵）は阿波国を豊臣家に返上し、高野山にて出家する。

家康の上杉景勝征伐に際し、至鎮は妻の氏姫が徳川家康の尊孫であり養女でもある事を理由に、益田宮内等わずか十数騎の兵を率い、氏姫と縁組間もない15歳で出陣した。

石田三成が挙兵すると、小山評定において、東軍に参加を表明し、関が原戦において南宮山の押さえとして参戦し武功を挙げた。

その結果、阿波国は再度、蜂須賀家が治めることとなった。

その後、至鎮は大坂の役において、木津川口砦や博労淵砦の戦いで、２代将軍徳川秀忠より7つもの感状を受ける働きをした。

これにより淡路一国8万1千石を与えられ、25万7千石を領する大封を得た。

氏姫は、蜂須賀に嫁いでからは、若い藩主の至鎮を守り20年の間苦楽を共にした。

しかし大坂の役の後、至鎮は急病を患った。
その病について幕府の陰謀で氏姫が至鎮に毒を盛り、至鎮は悔しさに地団駄を踏んで表御殿庭園の大きな青石を踏み割ったとの言い伝えがあるが、それは間違いだろう。

実際には夫婦睦まじく有馬温泉などに一緒に出かけたとの話も残っている。

至鎮が京都で治療を受けていた頃、家政と共に病気祈願に訪れた氏姫は要法寺の日恩上人に教化され、それが大石寺門流との縁となったとも言われている。

夫を亡くした敬台院は、元和8年頃白金の江戸中屋敷に入り人質生活を送ることになった。それから毎年銀50枚と綿百把を与えられることとなった。

この頃から敬台院は日精に深く帰依した。

大石寺御影堂の建立寄進、江戸鳥越・法詔寺建立、大石寺朱印状下附の実現、総本山二天門の建立等、日蓮正宗との関わりは深い。

蜂須賀家に嫁いだ時、化粧料として3000石をあたえられていたのが藍住町の矢上であった。
もともと禅宗のお寺だった矢上の正法寺は、敬台院により法華宗に改められた。その時村人全員が法華経に改宗したと言われている。

そして正保2年（1645年）に江戸の法詔寺を阿波に移して敬台寺を創立した。
寛文6年（1666年）に死去し、敬台寺に葬られる。法名は敬台院妙法日詔大姉。

氏姫の弟の小笠原 忠脩ただながの娘「繁姫」は蜂須賀忠英の正室となり、孫娘「金姫」は蜂須賀光隆の正室となる。

徳姫から登久姫へと続く信長、家康の血は氏姫、忠脩を経て益々濃く蜂須賀家に流れ込んでいく。

藩政拡大　各藩との縁組み

蜂須賀家政の娘「万姫」
大石内蔵助の高祖母

「万姫」は天城池田家初代「池田由之」に嫁ぎ「池田由成」を生む。

その「池田由成」の娘「池田熊子」は、赤穂藩浅野氏永代家老家である大石家の嫡男大石良昭に嫁ぎ、忠臣蔵で有名な「大石内蔵助」（大石良雄）を生む。
つまり、大石内蔵助は蜂須賀家政の玄孫にあたる。

その為か、吉良邸への討ち入りに際して、阿波・蜂須賀飛騨守（富田藩主蜂須賀隆重）の申し出により吉良上野介は呉服橋から本所へ移転したと言われている。（呉服橋は警備が厳しく本所のほうが討ち入りには適している。）

元禄15年8月19日には、吉良は呉服橋の屋敷を召し上げられて、江戸郊外の本所松坂町に移り住む事になった。
その後すぐ元禄15年12月14日に討ち入りは行われた。

　また、浅野内匠頭が饗応役となった元禄14年の翌年、討ち入りのあった元禄15年には饗応役として蜂須賀隆重（阿波富田藩主5万石）が選ばれている。

　万姫の次男である池田 玄寅の実子　三尾 正長は、赤穂藩が改易され浪人していた甥である大石良雄に資金援助をしていたらしい。

　内蔵助は討ち入り前に三尾　政長にいとまの手紙を出している。

　池田玄寅は家政に請われて徳島藩家老となり、蜂須賀玄寅と名を変え蜂須賀忠英に仕える。

　歴代阿波池田家の墓は東嶽禅師が庵主であった八万町中津浦の雲水庵に祀られている。

　万姫は慶長17年（1612年）、岡山藩で没する。享年20。

　法号は即心院殿梅岩宗清大姉。興源寺に供養塔が建つ。

池田家に嫁ぐ　蜂須賀至鎮の長女「三保姫」。

三保姫は慶長8年（1603年）蜂須賀至鎮と氏姫の長女として生まれる。

その時、至鎮18歳、氏姫12歳。　その後、岡山藩主・池田忠雄に嫁ぐ。

池田忠雄は、播磨姫路藩主・池田輝政の三男。母は徳川家康の次女・督姫。慶長7年（1602年）10月28日、姫路城で生まれる。

淡路国洲本藩主、のち備前国岡山藩第2代藩主。鳥取藩池田家宗家2代。

徳川家康の孫に当たることから慶長15年（1610年）、9歳で淡路洲本城に6万石の所領を与えられたが、岡山藩主である同母兄・忠継が17歳で早世したため、その跡を継いだ。

洲本藩は廃藩とされ、淡路一国は徳島藩の蜂須賀至鎮にあたえられた。

「三保姫」は、寛永7年（1630年）、忠雄との間に長男・勝五郎（後の鳥取藩初代藩主）を出産。寛永9年（1632年）、次男・勝三郎を出産した。

長男・勝五郎は3歳で鳥取藩初代藩主となり、元服して池田光仲と名乗り、紀州藩主・徳川頼宣の長女・茶々姫（因幡姫）と結婚しその血筋は今上天皇へと続く。

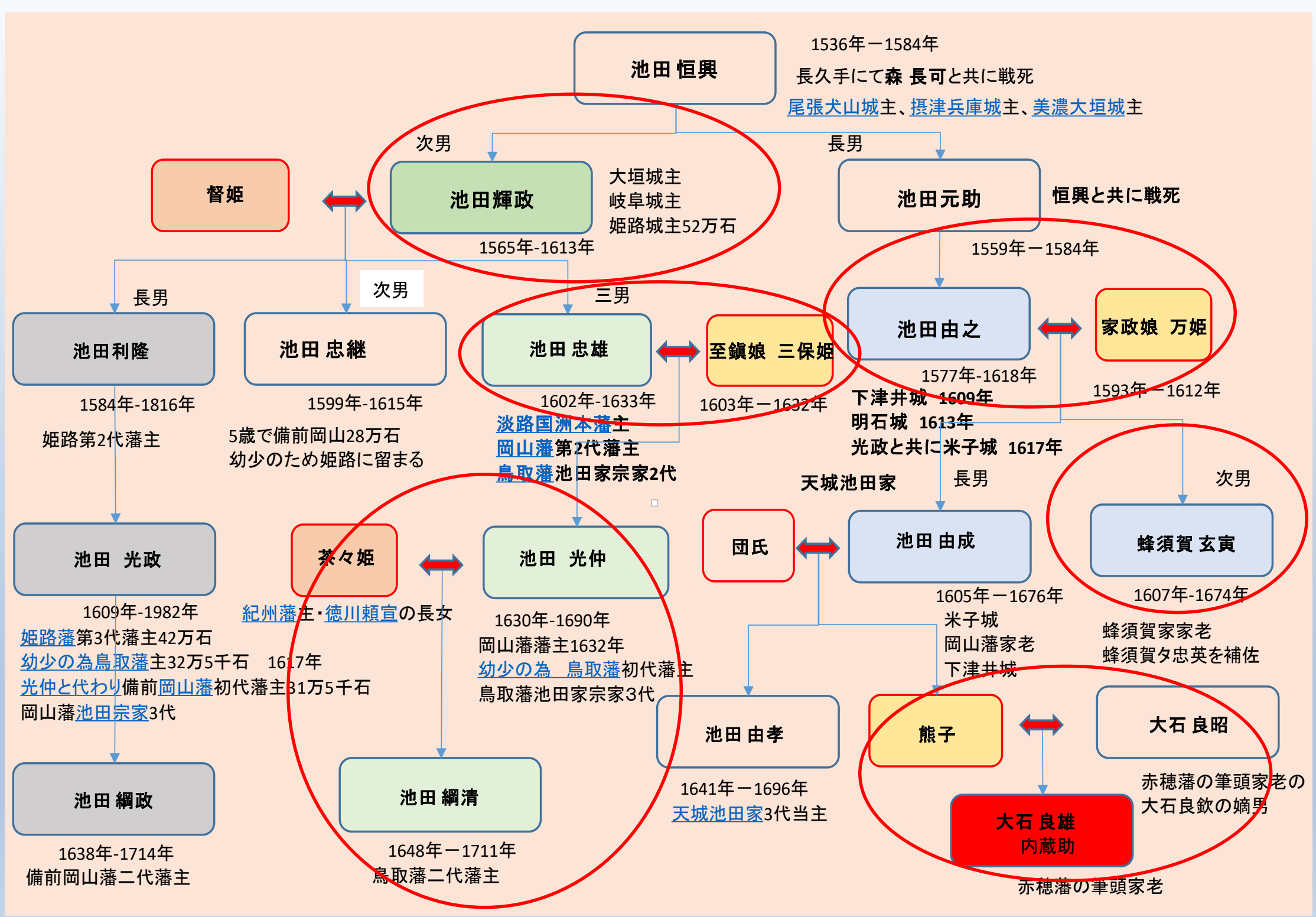
以後、鳥取池田家と紀州徳川家との姻戚関係が継続した。法号は芳春院殿妙囿日香大姉。墓所は岡山県岡山市にある清泰院。

寛永7年（1630年）忠雄が寵愛する小姓の渡辺源太夫が藩士・河合又五郎に殺害されるという事件が起こる。

1632年忠雄の死後、忠雄の遺言により、日本三大敵討ちの一つである鍵屋の辻の決闘（1634年）が行われる。

源太夫の兄の渡辺数馬と助太刀の荒木又右衛門により河合又五郎が討ち取られる。

三保姫はその騒動の最中に夫と同年に没する。享年30歳。


池田 恒興
1536年ー1584年
長久手にて森 長可と共に戦死
尾張犬山城主、摂津兵庫城主、美濃大垣城主
次男
長男
督姫
池田輝政
大垣城主
岐阜城主
姫路城主52万石
1565年-1613年
池田元助
恒興と共に戦死
1559年ー1584年
長男
次男
三男
池田利隆
1584年-1816年
姫路第2代藩主
池田 忠継
1599年-1615年
5歳で備前岡山28万石
幼少のため姫路に留まる
池田 忠雄
1602年-1633年
淡路国洲本藩主
岡山藩第2代藩主
鳥取藩池田家宗家2代
至鎮娘 三保姫
1603年ー1632年
池田由之
1577年-1618年
下津井城 1609年
明石城 1613年
光政と共に米子城 1617年
家政娘 万姫
1593年ー1612年
天城池田家
長男
次男
池田 光政
1609年-1982年
姫路藩第3代藩主42万石
幼少の為鳥取藩主32万5千石 1617年
光仲と代わり備前岡山藩初代藩主31万5千石
岡山藩池田宗家3代
茶々姫
紀州藩主・徳川頼宣の長女
池田 光仲
1630年-1690年
岡山藩藩主1632年
幼少の為 鳥取藩初代藩主
鳥取藩池田家宗家3代
団氏
池田 由成
1605年ー1676年
米子城
岡山藩家老
下津井城
蜂須賀 玄寅
1607年-1674年
蜂須賀家家老
蜂須賀タ忠英を補佐
池田 綱政
1638年-1714年
備前岡山藩二代藩主
池田 綱清
1648年ー1711年
鳥取藩二代藩主
池田 由孝
1641年ー1696年
天城池田家3代当主
熊子
大石 良昭
赤穂藩の筆頭家老の
大石良欽の嫡男
大石 良雄
内蔵助
赤穂藩の筆頭家老

幕府大老井伊家との婚姻、「阿喜姫」

家政の娘「万姫」の妹「阿喜姫」は徳川家康の命により、近江彦根藩二代目藩主・井伊直孝(井伊の赤虎　井伊直政の次男)のもとへ嫁ぐ。直孝はその後大阪夏の陣で活躍し、手柄を立てて井伊の赤牛と呼ばれるようになる。その後代々大老職を務めるようになった。

蜂須賀忠英が益田豊後事件で裁かれる時、大老として後ろ盾となったとも言われる。

また、家康の遠忌法会で将軍名代として日光東照宮に名代として参詣する御用は、直孝が務めて以降先例として彦根藩井伊家固有の御用となった。

この婚姻を皮切りに、それ以降も井伊家と蜂須賀家との間では幾度か婚姻が行われた。

阿波藩5代藩主蜂須賀綱矩の女「紀伊姫」は、近江彦根藩の第8代井伊直惟（いい なおのぶ）に嫁ぐ。

そして、近江彦根藩第12代井伊直幸（いい なおひで）の女「俊姫」は、阿波藩11代藩主蜂須賀治昭に嫁ぎ、12代藩主蜂須賀斉昌を産む。

更に、第13代藩主井伊直中（いい なおなか）の女で井伊直弼の姉の「穠姫」は12代藩主・蜂須賀斉昌の正室となった。

「ひこにゃん」は直孝の飼い猫をモデルにしたと言われている。

【滋賀県指定有形文化財】朱漆塗燻韋威縫延腰取二枚胴具足

井伊直孝の赤備えの鎧

武田氏が滅亡したのち、旧武田家臣は徳川家康が受け継いだあと、その多くは井伊直政に与えられた。そこで井伊直政は武田の赤備えを継承し、その勇猛さは「井伊の赤鬼」と畏怖された。その子直孝は、「井伊の赤牛と呼ばれた」

更に阿喜姫の妹、薄運の「辰姫」

「辰姫」は松平康長の次男で徳川家康の甥にあたる松平忠光の正室となる。

忠光との間には、後に上野七日市藩主・前田利意の正室となる二の丸殿を生む。

父の康長は松本藩領安曇郡大町組、池田組、松川組の計1万5000石を忠光に分知させ、支藩として立藩させる計画で、元和5年、千国街道池田宿に若松城の築城が起工された。

しかし、家督を相続することなく寛永6年（1629年）に早世したため沙汰止みとなった。享年32。

「辰姫」も同年に没する。

父である家政は薄運の辰の供養のため、丈六寺の本堂を再建し、同寺に辰の墓を建てた。法名は実相院殿不見貞心大姉。

更に、至鎮の女「三保姫」の妹「萬の方」。

旗本奴として有名な「水野成貞（直参旗本3,000石）」の伊達姿に一目惚れして13歳で嫁ぐ。

そして、幡随院 長兵衛を殺害したことで有名な「水野成之」(水野十郎左衛門)の母となる。

政略結婚の多い中、珍しい恋愛？結婚であった。

元和6年（1620年）蜂須賀至鎮が若くして没した後、藩主となった忠英が幼くて妻や子が居なかったため、代わりの人質となった敬台院に連れられて萬姫が江戸中屋敷に入ったのは6歳頃の事だったと思われる。

幼い頃父を亡くした萬姫は成貞の姿に勇ましかった父の面影を見たのかもしれない。

水野成貞の父「水野勝成」

成貞の父は三河刈谷藩主、大和郡山藩主の後、福島正則改易の後初代福山藩主となる「水野勝成」だ。

この男は凄い。徳川秀忠と勝成は乳兄弟であり、初陣の直ぐ後16歳の時の戦いで首級をあげ、信長から感状を与えられる等数々の武功があるが、父の部下や茶坊主などを切り捨てるなどの蛮行があり父に勘当され出奔。

京都では従者も連れず闊歩し南禅寺の山門に寝泊まりし、町に出ては多くの無頼の徒と交わり、清水では大いなる喧嘩を始め、多くの人を殺害する事件を起こした。

元祖あぶれものと言える。しかし勇猛であることを評価され黒田勘兵衛や小西行長等の武将に次々と仕え数々の武功を上げている。

その後も波乱で自由気ままな放浪人生を送り、ついには初代福山藩主となる。

人格的に問題があっても強ければ、世に伸し上がっていける時代だった。

萬の夫「水野成貞」

「成貞」は勝成の三男として生まれる。

徳川家光の小姓となり、3000石を領した。

しかし、直参3000石の旗本でありながら傾奇者・初期の旗本奴として行動していた。

奇抜な髪型をして髑髏の模様の服を着用し、刀の柄を棕梠（しゅろ）で巻いたもので揃えた仲間達と街を闊歩した。

萬姫はその姿に惚れ込んでしまったと言われている。

萬姫は嫁いでから成之（十郎左右衛門）、忠丘、娘（賀嶋政玄室）、娘（稲田種春室）、娘（山崎幸玄室）を産む。

成之、幡随院長兵衛をだまし討ちにする

成之は父成貞が没した慶安3年（1650年）後を継ぎ3000石で小普請組に列した。旗本きっての家柄でありしかるべき役に就けるが、お役入りを辞退して自ら小普請入りを願った。

成之もまた、江戸市中で旗本奴である大小神祇組を組織。家臣4人を四天王に見立て、綱・金時・定光・季武と名乗らせ、江戸市中を異装で闊歩し、悪行・粗暴の限りを尽くした。

旗本のなかでも特に暴れ者を仲間にし、中には大名・加賀爪直澄や大身旗本の坂部三十郎広利などの大物も混じっていた。

旗本という江戸幕府施政者側の子息といった大身であったため、誰も彼らには手出しできず、行状はエスカレートしていった。

そのため、同じく男伊達を競いあっていた町奴とは激しく対立し、町奴の大物・幡随院長兵衛を騙して殺害した。

成之はこの件に関して、切り捨てご免とお咎めなしであった。

水野十郎左衛門（初代市川左團次）「極付幡随長兵衛」1884年

十郎左衛門切腹

その後突然隠居すると言い出し、病気と称して出仕せず、遊び歩くなど行跡怠慢で寛文4年（1664年）に母・萬の方（正徳院）の実家の蜂須賀光隆にお預けとなった。

翌27日に評定所へ召喚されたところ、月代を剃らず着流しの伊達姿で出頭し、あまりにも不敬不遜であるとして即日に切腹となった。享年35。

2歳の嫡子・百助も誅されて家名断絶となった。夫として親として成之は何を考えて生きていたのだろうか。

十郎左衛門切腹後、お家は改易、萬姫は次男忠丘と共に阿波に帰り、蜂須賀光隆に預けられた。

正徳院は天和3年69歳で没して丈六寺に静かに眠っている。忠丘は元禄元年（1688年）に赦された。

あぶれ者の妻そして母として、夫に先立たれ、子や孫までも失った萬姫の悲しい人生を思うと切なくなる。

氏姫の母「登久姫」の妹「熊姫」
その娘の「亀姫」そして孫娘の「繁姫」

「登久姫」の妹「熊姫」は播磨姫路藩初代藩主「本田忠政」に嫁ぎ、「亀姫」を生む。

「亀姫」は「登久姫」の子である信濃松本藩の世継「小笠原忠脩(ただなが)(氏姫の兄)」の正室になる。
「小笠原忠脩」は、慶長20年（1615年）の大坂夏の陣　天王寺・岡山の戦いで父と共に豊臣軍と戦うも敗死した。享年22。

長男の長次が幼年であったため、小笠原氏の家督は弟の忠真(ただざねが)継ぐこととなり、亀姫は家康の命で忠真に再嫁した。
忠真は、島原の乱の際には長崎守備の任を果たし、剣豪・宮本武蔵が最も長く仕えたといわれる。後に播磨三木明石10万石を経て、豊前小倉15万石に移封された。

亀姫の娘の「繁姫」は、従兄にあたる蜂須賀忠英の正室に入り、寛永7年（1630年）に蜂須賀光隆、寛永11年（1634年）に蜂須賀隆重（初代富田藩主）を出産する。

小笠原家と蜂須賀家の関係も濃い

最後に、蜂須賀重喜の娘儀子(載)と幸子(寿代)
そして鷹司 并子

蜂須賀重喜は32歳の時阿波騒動で隠居を命じられ、明和7年（1770年）江戸小名木屋敷に移り住んだ。

その時に二人の姫（載姫（さい）と寿代姫（ひさよ））は梁田時の次女、三女として生まれた。

重喜は安栄2年（1773年）、療養のため国元へ帰り大谷別邸に住む。

その時に二人の姫も大谷屋敷に移り住む。

重喜は大谷屋敷で、著名な金蒔絵師の飯塚桃葉や彫物師の堀江興成を召し抱え、陶芸や茶道に嵩ずるなど派手で豪奢な生活を始めた。

その時に絵師として召し抱えた河野栄寿と矢野栄教は藩主の重喜の絵の稽古相手をつとめ、重喜の娘、載姫と寿代姫にも大谷屋敷で狩野派の絵を教えた。

二人の姫は優しくて気品のある絵を残している。

儀子（さい）の習作　儀子は天明5年(1785)関白の鷹司政熙に嫁ぐ

蜂須賀家、公家への傾斜を強める

その後、儀子（さい）は天明5年(1785)関白の鷹司政熙に嫁ぎ、鷹司 政通と鷹司 并子(すねこ)を生む。
幸子（ひさよ）は権大納言の醍醐輝久に嫁ぎ、醍醐輝弘を生んだ。

鷹司 并子は、蜂須賀斉昌の正室である穣（じょう）姫（彦根藩15代藩主　井伊 直弼の姉）が文政4年（1821年）に亡くなった後、継室として斉昌に嫁ぐ。

その後、儀子の息子、政通は関白として30年もの長い間、朝廷で大きな権力を持つことになる。
そして政通は水戸藩主徳川治紀(はるとし)の娘・鄰(りん)姫を娶り鷹司 標子(しなこ)が生まれる。

その鷹司 標子は蜂須賀 斉裕の正室となり、蜂須賀 茂韶を生む。

この様にして須賀家では、鷹司家や醍醐家との婚姻関係を通じて公家への傾斜を強めるようになっていく。

その事が、蜂須賀 茂韶が、2代貴族院議長そして文部大臣を勤めて、麝香間祗候（じゃこうのましこう）待遇を受け、正二位勲一等侯爵の位階まで上り詰めることが出来た事と繋がるのかもしれない。

参考資料

1. 蜂須賀家記　岡田鴨里　明治9年
2. 尾張群書系図部集
3. 寛政重修諸家家譜
4. 武功夜話
5. 史伝 蜂須賀小六正勝　牛田義文
6. 蜂須賀系図　森本文庫
7. 蜂須賀家家臣団家譜史料データベース　徳島大学付属図書館
8. 徳島藩士譜　宮本　武史／編 -- 徳島藩士譜刊行会 - 1972
9. 蜂須賀御系図　徳島県立図書館
10. 訳注　阿淡藩翰譜　徳島藩・上級家臣録　牛田義文
11. 蓬庵公　呉郷文庫本　小出植男 ／編
12. 蜂須賀蓬庵　徳島県　1914年
13. 蜂須賀三代正勝・家政・至鎮 二五万石の礎　特別展　徳島市立徳島城博物館／編
14. 蜂須賀小六正勝　渡辺　世祐／著 -- 雄山閣 - 1929
15. 乱舞の中世 白拍子・乱拍子・猿楽 歴史文化ライブラリー　沖本幸子／著

蜂須賀家　家系図

織田信長 1534年生
側室 生駒 吉乃 久庵桂昌大禅定尼 1538年生
兄妹
生駒家長 生駒八右衛門
椿岩妙寿 神野民部少輔の娘

長男 信忠 1555年生
次男 信雄 1558年生

白雲院 側室 鳥井越中守の娘
蜂須賀 正勝 1526年生
お不宇 まつ
大匠院 益田持正の娘 三輪 吉高の娘？ 益田一正、正忠の妹 益田豊後の伯母

黒田勘兵衛
福岡藩初代藩主
黒田長政
離縁
宝珠院
糸姫
家老
賀島長昌
奈良姫

織田信長 生駒吉乃の姪
信忠、信雄の従兄妹
慈光院 1563年生 ヒメ
弟 生駒 善長は阿波生駒氏の祖
1558年生
蜂須賀 家政
養子 家政の異父兄
東岳俊禅 江岸山福聚寺（興源寺）住持 北畠 具教と大匠院の子？

徳川家康の甥
戸田 忠光
辰
実相院
側室の子
1 彦根藩主 大老
井伊 直孝
阿喜姫
天城池田家初代
池田 由之
万
即心院

従姉妹
1559年生 見星院 徳姫 五徳
織田信長と生駒吉乃の娘
1559年生 松平 信康
徳川家康と築山殿の長男

池田 由成
池田由英 蜂須賀玄虎 蜂須賀家家老
実子 三尾 正長 池田正長
養子 蜂須賀 隆矩 4 忠英の四男
大石良欽の嫡男
池田 熊子
大石 良昭
大石良雄 大石内蔵助

播磨姫路藩初代藩主
本多 忠政
妙高院 熊姫
信濃松本藩の初代藩主
小笠原 秀政
1576年生 登久姫 峯高院

年号は在位開始年
徳島藩 1586年生 よししげ
徳川将軍家

栄寿院 国姫
本多 忠刻
円照院 亀姫
従兄妹 小笠原 忠脩 夏の陣で秀政・忠脩は共に戦死
1592年生 氏姫 敬台院 家康、信長の曾孫
①蜂須賀至鎮 1603年
①家康 1603年

延岡藩初代藩主
有馬 直純
徳川秀忠の娘
千姬
1611年生 ただてる
②秀忠 1605年

淡路国洲本藩主 岡山藩第2代藩主
池田 忠雄
三保姬 氏姫の娘
1603年生
千姬の化粧料1000石加増
利相院 側室
播磨龍野藩主 小笠原 長次
氏姫の姪
繁姬 齡昭院
従兄妹
②蜂須賀忠英 1620年
③家光 1623年

福山藩主・勝成の三男
水野 成貞
萬の方
1614年生
忠英五男 蜂須賀 隆喜
4
忠英四男 蜂須賀 隆矩
繁姬の姪
金姬 姬路藩第2代藩主
従兄妹
榊原 政房の娘
1630年生 みつたか
忠英長男
③蜂須賀光隆 1652年
④家綱 1651年

（水野十郎左衛門）
水野 成之 幡随院 長兵衛殺害
蜂須賀 綱矩 ⑤
松 嶺松院
つなみち
④蜂須賀綱通 1666年

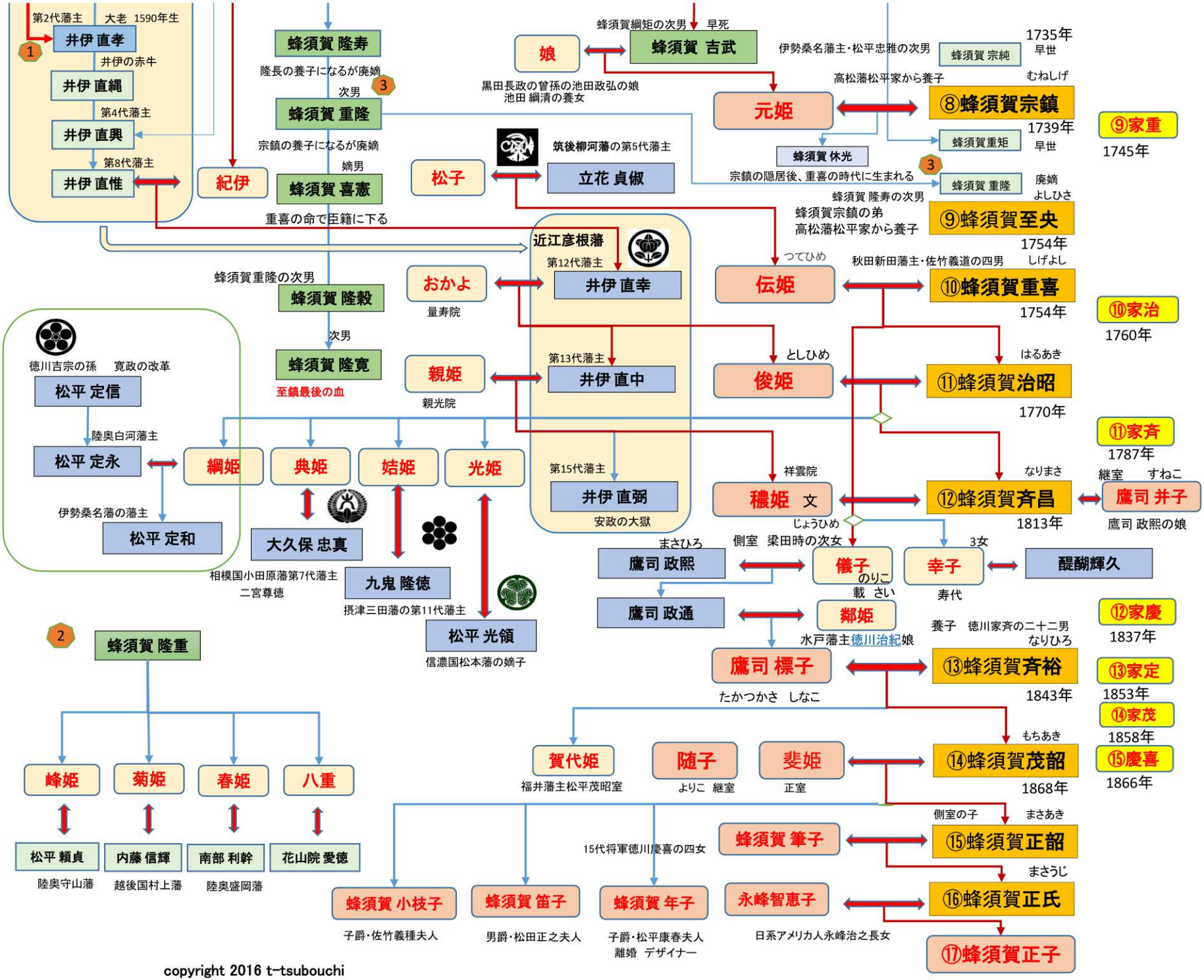
近江彦根藩
井伊谷城主井伊直盛の娘
井伊直虎
女地頭 次郎法師 井伊 直親の婚約者
家督を譲る
初代藩主 井伊 直親の子
井伊 直政
直継 井伊の赤鬼
千代鶴
死亡

阿波富田藩
初代藩主 蜂須賀 隆重 2
忠英次男
第2代藩主 蜂須賀 隆長
長男
第3代藩主 蜂須賀 宗員
養子 蜂須賀綱矩の四男
蜂須賀綱矩が伯父の蜂須賀隆重に5万石を分知し富田藩を立藩
蜂須賀綱矩の三男

架 園
養子 忠英の孫
つなのり
⑤蜂須賀綱矩 1678年
嫡子吉武夭折
⑤綱吉 1680年
⑥家宣 1709年

宗家に戻る
蜂須賀綱矩の四男
むねかず
岡田氏
⑥蜂須賀宗員 1725年
⑦家継 1713年

三男 蜂須賀 宗英
末期養子
むねてる
⑦蜂須賀宗英
⑧吉宗 1716年



copyright 2016 t-tsubouchi